

中国貨幣の歴史

3 金属貨幣の発生 - 刀幣 -



はんしゅとう
反首刀

せんしゅとう
尖首刀

ほうしゅとう
方首刀

えんしゅとう ちよくとう
圓首刀 (直刀)

(写真はすべて80%に縮小)

とうへい とうか とうせん 刀幣 (刀貨、刀銭)

刀幣は、刀身と柄の部分からなり、刀身の先端部分(「首部」と呼ばれる)の形状により、首部が反返った形の「反首刀」、尖った形の「尖首刀」、四角い形の「方首刀」、丸みを帯びた形の「圓首刀」(刀身と柄の部分が直線的な形をしているため「直刀」とも呼ばれる)に分類させる。柄の部分に1本ないし数本の縦線があるほか、柄の端には環がある。

刀幣（刀貨、刀錢ともいう）は、布幣とともに中国における金属貨幣の登場を象徴する貨幣である。

刀幣は、木簡や竹簡に誤って書いた文字を削るときに用いた「削」と呼ばれる小刀が発展、転化した青銅製の貨幣である。古代中国において、「削」は筆とともに文字を書くときに欠かせない筆記用具であり、記録をつかさどる書記などの役人は「刀筆の吏」と呼ばれた。

刀幣は西周末期から春秋時代にかけての時期に布幣よりやや遅れて登場し、春秋戦国時代には、その流通地域は黄河流域東部の齊の国（現在の山東省）から北の燕（現在の遼寧省・河北省）や趙（現在の山西省）の国に広がり、現在の内モンゴル自治区の一部を含む中国北部一帯で広く流通した。なお、燕や趙では刀幣とともに布幣も流通していた。

布幣は時代とともに小型・軽量化していったことが知られているが、刀幣についてはそうした定説が確立されるまでには至っていない。しかし、実際の出土状況などから次のようなことが知られている。

「反首刀」は、重量が40～50 g程度と刀幣の中でも大振りで、なかには60 gを超えるものも発見されている。「反首刀」は、齊で大量に出土し、また、「齊呑化」（写真、「呑」は「大」あるいは「法」と読まれる）「節墨之呑化」など「齊」の国名や地名（「節墨」）を示す文字が刻まれていることから「齊刀」とも呼ばれている。

一方、「尖首刀」、「方首刀」、「円首刀」は、大きなもので20 g程度と「反首刀」に比べ小振りで、なかには10 gに満たない小さなものもある。「尖首刀」は、燕のうち河北省を中心とした地域で出土しているが、刀面に刻まれている文字は記号的な文字や数字のものが大半である。「方首刀」は、「尖首刀」の刀身の先端部分が方形に変化したものと考えられており、燕、趙の両国にまたがる広い地域で大量に出土している。「方首刀」には「明」の文字（写真、「日」と「月」）が刻まれていることから「明刀」とも呼ばれているが、「明」字の解釈には燕あるいは趙の地名とする説など諸説あり、「明」字の形態により鑄造年代を区分する見解もある。趙を中心に出土している「円首刀」は、柄の端にある環が小さく全体的に薄手であるという形状の特徴から、刀幣の中でも後期のものと考えられている。

[山岡直人、日本銀行金融研究所研究第3課]

【参考文献】

王毓銓、『我国古代貨幣の起源和發展』、中国社会科学出版社、1990年

奥平昌洪、『東亜錢志』、岩波書店、1938年

馬飛海・汪慶正編、『中国歴代貨幣大系』 先秦貨幣 上巻、上海人民出版社版、1988年

三上香哉、『考古学講座 貨幣』、雄山閣、1929年

山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年

山岡直人、「中国貨幣の歴史 2 金属貨幣の発生 - 布幣 - 」、『金融研究』第22巻第2号、2003年